

令和6年度自己評価表（最終評価）

鳥取県立青谷高等学校

長期目標	～ふるさとキャリア教育 生涯学び続けるために～	今年度の	1 知を磨く	○進路実現100% 生涯にわたって学び続ける力を育成する。
(学校ビジョン)	自分らしさに誇りをもち、社会で信頼され、社会に貢献する人材の育成	重点目標	2 徳を高める	○ルールを守り、郷土愛や社会の一員としての自覚と使命を育む。
			3 健康を育む well-being	○一人ひとりが輝き、皆から愛され必要とされる存在を目指す。
			4 業務改善の推進	○時間外業務時間縮減を推進する。

評価基準 A：十分達成（95%） B：概ね達成（75%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）

年 度 当 初					評 価 結 果 （ 9 ） 月		
評価項目	評価の 具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 知を磨く	○進路実現100% 生涯にわたって学び続ける力を育成する。	○進路実現98% ○連携を取り、計画的に補習、面談を実施している。 ○基礎学力の定着を組織的に行っている。 ○STEAM Lab.を新設、始動している。 ○青谷学Ⅰ・Ⅱの学習を通して協働、情報収集、情報発信力を身につけている。 ○地域コーディネーターの配置により、地域と組織的につながっている。 ○各種資格、検定の受験者は昨年度並み。 ・「授業で基礎的・基本的な学力が身についている」と思う生徒が39.3%【指標①・学⑮】 ・「授業の予習や復習をしている」と肯定的に思う生徒が57.8%【指標②・学⑫】 ・「講演会等が進路や生き方を考えるのに役立っている」と肯定的に思う生徒が87.4%【指標③・学⑰】	○進路実現100% 希望進路の実現に向けて、努力している。 ○校内GIGA研究等により、教職員のICT活用スキルが向上し、活用が促進されている。 ○青谷学Ⅰ・Ⅱを通じて、生徒がさらに主体的、積極的に地域について学び、地域貢献や交流を図っている。 ・「授業で基礎的・基本的な学力が身についている」と思う生徒が45%以上。【指標①・学⑮】 ・「授業の予習や復習をしている」と肯定的に思う生徒が65%以上。【指標②・学⑫】 ・「講演会等が進路や生き方を考えるのに役立っている」と肯定的に思う生徒が90%以上。【指標③・学⑰】	○「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」「3年進路HR」の有効活用。 ○就職希望者の適性と希望のすりあわせのための早期面談実施。 ○放課後、長期休業中の補習の充実。 ○基礎力診断テストの活用研修会の実施。 ○ICT活用の促進。 ○充実した青谷学Ⅰ・Ⅱの継続・発展。	○就職希望者内定100%。 進学希望者 進学先未決定1名 引き続き進路指導していく。1、2年次の進学希望者には冬季休業時、放課後に補習対策を行った。モチベーション高く臨む生徒が多かった。 ○「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」「3年進路HR」などで多くの外部講師を招き、キャリアについて考える場面を提供することができた。ベネッセなど外部人材を招き、生徒および教員向けの研修を実施した。 ○様々な機器の効果的な使い方について、職員有志の研修や、事前の研修を積み重ねた。 ○青谷学Ⅰ・Ⅱで地域との繋がりを深めた。成果発表会では地域の方から生徒の研究に対して好意的な意見が寄せられた。 ・「授業で基礎的・基本的な学力が身についている」と思う生徒が33.6%。【指標①・学⑮】 ・「授業の予習や復習をしている」と肯定的に思う生徒が52.2%。【指標②・学⑫】 ・「講演会等が進路や生き方を考えるのに役立っている」と肯定的に思う生徒が88.5%。【指標③・学⑰】	B	○就職希望、進学希望に関わらず、進路実現に向けて早めのスタートを切るために、進路部と年次の連携をより一層持つ。 ○ICT機器の活用し、「身につく、分かる授業」等の授業改善、工夫に努め基礎学力の向上を図る。 ○講演会等の事後の振り返りを丁寧にを行い、キャリア形成に繋がる意識付けをさらに持たせるようにする。
2 徳を高める	○ルールを守り、郷土愛や社会の一員としての自覚と使命を育む。	○授業規律や授業態度については、一部生徒に改善の余地あり。 ○講演会等を通じて進路や地域のことを知り、刺激を受けている様子がうかがえる。 ○各種ボランティアへの参加は一部生徒にとどまっている。 ・「学校生活で周囲の人たちとの人間関係は良好」と思う生徒が49.6%【指標④・学⑬】 ・「地域や学校外でのボランティア活動に参加した」生徒が51.9%【指標⑤・学⑳】	○全職員の共通理解のもと、生徒の授業規律・授業態度が高まっている。 ○他者への配慮ある言動・行動ができ、良好な人間関係を築くことができている。 ○多くの生徒にボランティアを紹介し、ボランティアと進路の連動性を意識させる。 ・「学校生活で周囲の人たちとの人間関係は良好」と思う生徒が60%以上。【指標④・学⑬】 ・「地域や学校外でのボランティア活動に参加した」生徒が60%以上。【指標⑤・学⑳】	○少人数指導やチームティーチング、特別支援教育支援員の支援により、クラス全体及び一人ひとりへのきめ細やかな対応を継続する。 ○産業社会と人間や青谷学を通じて、地域連携を図り、地域行事にも積極的に参加する生徒を育成する。 ○生徒会執行部・部活動（同好会）・進路等を通してボランティア活動を紹介し、生徒の意欲を高める。	○生徒の授業規律・授業態度は改善の傾向にある。指導が困難な生徒に対しては、必要に応じて個別指導を行った。生徒の解釈と教員の認識に乖離があり、共通理解が必要である。 ○他者への配慮が不十分なところもあり、人間関係にトラブルがあったケースも見受けられたが、以前に比べると落ち着いてきている。 ○継続的な地域連携の結果、少しずつではあるが、主体的な地域行事への参加も見られ始めた。 ○ボランティアに関する情報を随時提供し、生徒会執行部や部活動単位での参加ができた。 ・「学校生活で周囲の人たちとの人間関係は良好」と思う生徒が41.6%。【指標④・学⑬】 ・「地域や学校外でのボランティア活動に参加した」生徒が51.3%。【指標⑤・学⑳】	B	○職員間だけでなく、生徒とも共通理解を図れるよう働きかけを行っていく。 ○生徒状況シート活用をより充実させたい。 ○地域コーディネーターと連携しながら地域活動への参加を促す。 ○県内外の他校の同世代との交流の場を構築していく。 ○授業と関連させボランティア活動への意欲を高めていく。
3 健康を育む well-being	○一人ひとりが輝き、皆から愛され必要とされる存在を目指す。	○挨拶を返すことはできるが、自らが自主的に挨拶することのできる生徒は少ない。 ○個別の保健指導に加え、保護者への面談を実施し、意識を高めている。 ○執行部が中心となり、学校祭の企画運営を行い、また募金活動、校則の見直し等の協議を行っている。 ○部員不足等で活動は低迷しているが、大会出場、作品展出品など満足度を高める活動を継続している。 ○公式Instagram、ホームページ更新を積極的にしている。 ・部活動は充実していると肯定的に思う生徒が86.2%【指標⑦・学㉑】（加入率56.8%）	○基本的生活習慣が確立している。 ○挨拶が行き交う学校になっている。 ○自分の人権、他者の人権を尊重し共に生きる態度を持っている。 ・「毎日の挨拶はきちんとしている」と思う生徒が55%以上。【指標⑥・学⑤】 ・部活動は充実していると肯定的に思う生徒が90%以上。【指標⑦・学㉑】	○欠席、遅刻、早退は届け出を徹底させるとともに、家庭との連絡を密にし。社会の一員としてふさわしい礼儀・挨拶・言葉遣いの指導を行う。 ○人権教育LHRや講演会及び「だっぴ」など様々な取り組みの中で人権意識を高めたり、自己肯定感を養う。 ○日々の生活において周囲の者に対する配慮ができるよう、折々に個々の生徒に声かけをするとともに教員間で情報を共有し連携して指導していく。 ○医療・福祉に関する外部機関と密に連携し生徒の支援にあたる。	○3年次生では、面接指導、就職活動を通じて礼儀、挨拶、敬語の使い方などについて日常的に声かけをすることができた。2年次生についても三学期から就職面談を行うことで、社会人としての身だしなみや礼儀作法の意識付けを行っている。 ○こちらから挨拶をすれば答えてくれるが、自主的に挨拶をできる生徒が少ない。 ○個別の必要に応じて外部機関と連携し生徒の支援にあたった。 ○生徒の活動を中心とした人権教育LHRを展開することで、生徒は主体的に人権について学習できた。 ・「毎日の挨拶はきちんとしている」と思う生徒が40.7%。【指標⑥・学⑤】 ・部活動は充実していると肯定的に思う生徒が88.2%。【指標⑦・学㉑】	B	○規律、身だしなみ等の指導は全職員で共通理解を図り、1年次から指導にあたる。生活習慣を確立するためにも、スマホ利用のモラル及び遅刻指導に力を入れる。 ○生徒の自己肯定感向上のために、各教員が各種情報・データを活用しながら、積極的に生徒に声かけをする。 ○個別機関との連携を密にしていく。
4 業務改善の推進	○時間外業務時間縮減を推進する。	○業務日誌のデジタル化の推進により、情報共有、業務縮減につなげている。 ・全教職員が、時間外業務時間は月平均45時間以内、年360時間を超えた職員は2名。【指標⑧】 ・教職員の年休取得が平均年15.53日。【指標⑨】	○教職員が健康であり、教育活動が充実している。 ・全教職員が、時間外業務時間は月平均45時間以内、年360時間以内。【指標⑧】 ・教職員の年休取得が平均年15日。【指標⑨】	○管理職による声かけ。 ○毎月の部活動計画・実績の点検。 ○教育DXをさらに進める。	○職員の勤務状況を把握し、勤務の割り振り等を行った。 ○アンケートや申込にGoogleフォームを活用し、業務削減につなげることができた。 ○デジタルサイネージにGoogleドライブを活用し、情報の伝達を簡易化した。 ・時間外業務時間は月平均45時間超え、及び年360時間を超えた職員は1名。【指標⑧】 ・教職員の年休取得が平均年14.70日。【指標⑨】	A	○会議、委員会等を精選し教育活動の効率化を図る。 ○校務のデジタル化を一層進めていく。